新 今昔物語

第26話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑬

「石段を　数えて登る　観音さん」

野崎観音は、正式には「福聚山慈眼寺」という曹洞宗のお寺です。寺の由来では奈良時代に来朝したインドの僧に「野崎の地は釈迦が初めて仏法を説いた鹿野苑によく似ている」と言われた行基が、白樺で十一面観音像を作り、この地に安置したのが始まりとされています。

平安時代の中頃には中興の祖と呼ばれる江口の君が広大な伽藍を建て再興しましたが、戦国時代の永禄12年（1569）、松永久秀により本堂など寺の全てが焼失したとされています。

その後は小さなお堂で営んでいたとされていますが、宝永5年（1709）に鋳造された寺の梵鐘には、江戸時代の初めに青巌和尚によって復興が始まり、4世の嶺南和尚、5世の大真和尚によって成し遂げられていくことが刻まれています。特に、大真は旧暦の4月1日から10日の間、無縁経の法会を営み、当時は秘仏であった十一面観音の公開も行ったことから、参詣者がますます増えるようになり、それは後に庶民の間で流行する「野崎参り」のきっかけになったとも考えられています。

野崎観音は、近松門左衛門の「女殺油地獄」、近松半二のお染・久松の心中を扱った「新版歌祭文」の作品や上方落語の「野崎詣り」、そして特に昭和10年（1935）に流行った東海林太郎の「野崎小唄」によって全国的にも知られるようになりました。

現在も「野崎参り」の行事は盛況で、毎年の5月1日から8日にかけては出店が並び、多くの人々で賑わいます。

（生涯学習課）

山門（楼門）［宝暦9年（1759）］建立